発表遺跡２

大木戸遺跡（おおきどいせき）

公益財団法人山梨文化財研究所　宮澤公雄

１　所　在　地　甲州市塩山下於曽・熊野地内
２　調査主体　公益財団法人山梨文化財研究所
３　調査期間　令和元年５月９日～７月22日
４　調査面積　1,200㎡
５　調査原因　店舗建設に伴う発掘調査
６　調査担当者　宮澤公雄
７　調査概要

甲州市大木戸遺跡は、笛吹川と重川に挟まれた甲州市塩山下於曽・熊野地区に位置しており、両河川よって形成された南にゆるやかに傾斜する扇状地のやや小高いところに立地しています。

周辺は、道路建設や建物建設に先立って発掘調査が数多く行われていて、古くは縄文時代前期の住居跡や土器が発見されていますが、奈良・平安時代の住居跡が大多数を占めています。本調査区の南に隣接し、銙帯を出土した市道下塩後22号線地点、和歌刻書土器が発見されたことで著名となったケカチ遺跡など奈良・平安時代の遺跡が密集していることが明らかとなっていて、遺跡の多い塩山地区のなかでも古代にはもっとも栄えた地域であったということができるかもしれません。

今回の発掘調査によって、平安時代の竪穴住居跡９軒をはじめとして、土坑･ピット67基、溝跡７条、竪穴状遺構１基などが発見されました。竪穴住居は、ほぼ南北に主軸を採り、一辺３～４ｍほどの方形を呈していました。住居の東壁ないし北壁には石組みを主体としたカマドをもっていますが、多くは東壁の南側コーナー寄りに造られていました。柱穴などの付属施設は確認できませんでしたが、一部の住居には壁際に沿って周溝が巡らされていました。

調査によって発見された遺物には、縄文時代中期の土器・石器をはじめとして、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器などの土器類、刀子・鎌などの鉄製品、砥石、土錘などの土製品、鍛冶に関わる遺物などがあります。

土器に墨書きされた墨書土器は、多用されない時期の住居が多かったためか、あまり確認できていませんが、８号住居からは「イ王（人ベンに王か）」と墨書された土器が出土し、７・９号住居からも判読不明ながら墨書土器が発見されています。

６・９号住居からは製鉄の際に出る不純物である鉄滓が、２号住居からは金属を溶かす時に風を送りこむ装置であるフイゴに取り付けられた風を送る土製の管である羽口片が出土していて、集落内で鍛冶作業が行われていたことが確認されました。

その他､漁労具である土錘が発見されました。通常、土錘は素焼きである例がほとんどですが、今回発見されたものは須恵質であり、窖窯によって焼かれたものだと思われます。どこで焼かれたのか、量産されていたのかなどは不明ですが、あまり類例のないものと言えます。

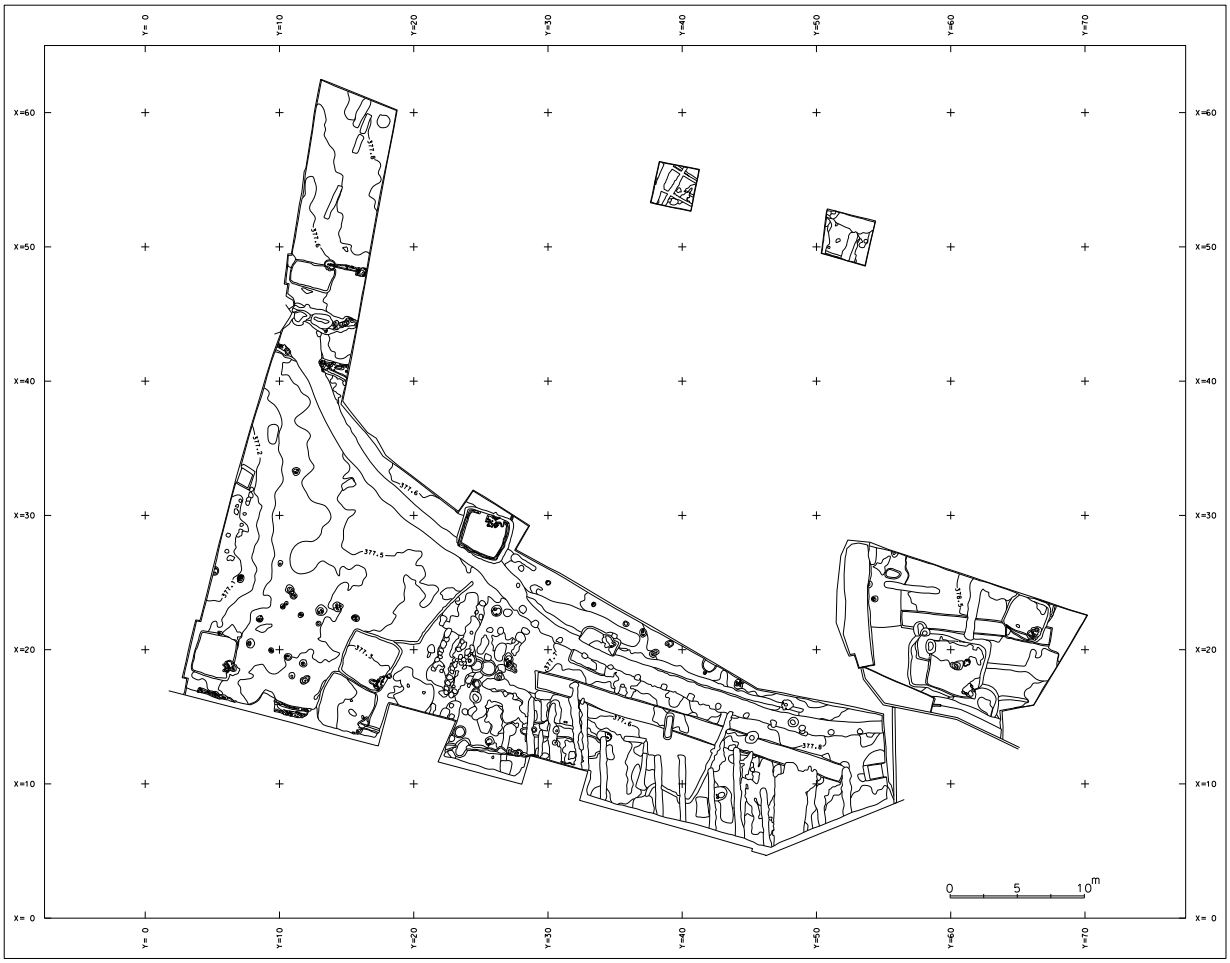
今回調査された地点では、出土した土器などからおよそ4,500年ほど前の縄文時代中期には人が住んでいたようですが、残念ながら住居跡などは発見されませんでした。人が定着して生活するようになったのは、平安時代の10世紀前半から11世紀前半になってからのようですが、その中心は11世紀はじめをまたぐころのものです。

先にもみたように、この時期の住居跡は、本調査区の東に隣接する塩山西バイパス地点、南に位置する市道下塩後22号線地点や后畑遺跡、后畑西遺跡、ケカチ遺跡、梶畑Ｂ遺跡、五反田遺跡などでも数多く発見されています。

本地域におけるこれまでに発見された住居跡は、奈良・平安時代に限ってみても、230軒余りを数えます。山梨県内において、このような濃密な在り方を示す例は稀有で、古代甲斐国において有数の規模を誇るムラを形成していたことを示しているものといえます。

本地域は、平安時代中ごろ（おおよそ930年代）に成立した辞書である『和名類聚抄』に記載された、「山梨郡於曽郷」の中核を成す集落であったものと思われます。

今回の発掘調査は、限られた調査範囲であったこともあり、９軒の竪穴住居跡を発見したにすぎませんが、平安時代においてこの地域が大きなムラを形成していたことが改めて確認され、本調査区もその一画を占めていたことを明らかにすることが出来ました。

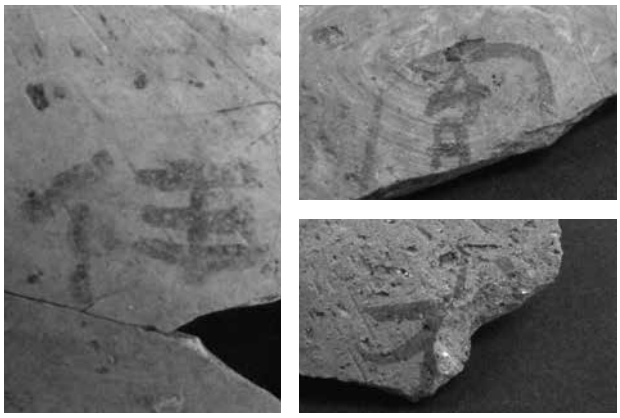


大木戸遺跡全体図

８号住居遺物出土状況

９号住居遺物出土状況

１号土坑遺物出土状況



出土した墨書土器